

に例があまりなく面白かった。

又ナポリではポンペイの廃墟を訪れたが、此処では特に Fish Market の跡に注目した。広場の一隅に上部アーチ型になつた小間があり、この辺からは魚の鱗や庖丁等が多く発掘された由、今から 2000 年前既にこの様なマーケットがあつたかと思うと感慨深かつた。ナポリ滞在中の一日カプリ島へ行き有名な青の洞窟見学後登つた島の頂上に、大きな土産物店があり、此処のショー・ウィンドウの真中に、日本産真珠の標品が箱に入れ堂々展示してあつた。

(10) 伊太利より帰国へ

最後の SAS 機に乗つてローマを後にし、南廻り近東諸国を経て帰国の途についた。途中北アラビアのシリア沙漠上空で恰度黎明が訪れ、朝雲たなびく下界の東天に、真紅の太陽が上る壮厳さは筆舌に尽し難い。次第に明るくなると見渡す限り沙漠地帯、僅かに細い道路が糸の様に延々と続き、自動車は蚤の様に後に砂埃をたてて走る。イランに入ると皴々たる岩山が続き、緑色のものは何一つ見えない。続いて藍青色のアラビア海に見とれている中間もなくカラチ着陸。沙漠と砂塵の街、暑くて氣息奄奄、土人が飛行機の整備をする。スチュワーデスが富士山と鳥居の絵のついた絹ばり団扇を渡してくれる。次いで印度に入ると灌漑が行届き、青緑色の木が見えはじめる。夜となつてバンコック着陸。なま暖かく、立派な空港で少憩する。機上で第二夜が明け、水田地帯が見えだしたと思うとマニラ着陸、いよいよ祖国日本に近づく。此処から太平洋を一路北上、雲中飛行を続け何一つ見えない。7 時間程後、雲の隙間から突然伊豆半島が見えはじめた。狭く建てこみ、ごちゃごちゃした町並、溢れた川に木材が一ぱい浮いている。間もなく東京湾の海苔場が見えたと思うと、突つこむようにランディング。冷雨に煙る羽田に無事着いてほつとした。(完)

(三重県立大学水産学部)

Dr. FRANZ MOEWUS, Prof. CURT HOFFMANN
及び Prof. GILBERT M. SMITH 三博士の訃

昨年は春から夏にかけて著名な 3 人の藻類学者の訃が報ぜられた。即ち 4 月にはクラミドモナス科の諸種等の研究で有名なアメリカ合衆国マイアミ大学の FRANZ MOEWUS 博士が 50 歳で急逝され、6 月には海藻の生理、生態、利用等の方面に造詣の深かつた、独乙キール大学の教授で同附属海洋研究所

の CURT HOFFMANN 博士が 60 歳でなくなつた。次で 7 月にはアメリカ合衆国スタンフォード大学教授 GILBERT M. SMITH 博士の死が報ぜられた。氏の隠花植物、又北米産淡水藻の教科書等の著書は我国に於いても頗る著名である。此処に謹んで哀悼の意を捧げその御冥福を祈る。 (山田幸男)

新 著 紹 介

A. Д. Зинова: О Двух Бурых Водорослях из Антарктики—*Phyllogigas* и *Himantothallus*

— Академия Наук СССР Всесоюзное Ботаническое Общество Ботанический Журнал, Том XLIV, 3 (1959),
Издательство Академии Наук СССР, Ленинград,
В-164, Менделеевская Линия, 1.

エ・デ・ジノバ著: 南極産褐藻類の 2 属, ヒマントタルス属と ヒロギガス属に就いて (挿図 6 枚付)

— ソ連邦植物学雑誌, 14 巻, 3 号 (1959) 掲載,
発行所・レニングラード, В-164, Менделеев通 1
ソビエツト科学アカデミー (価格 15 ルーブル)

著者はソ連邦科学アカデミー・コマロフ名称植物学研究所に所属の女流海藻学者として最近活潑な仕事を遂行している。

扨て今回著者は、1956 年度のソビエツト南極学術探検隊が持ち帰つた、大型の褐藻標本 2 個体を詳細に観察し、これ等の材料とゲッブ (1905, 1907)・スコツツベルグ (1907) 等が南極の仕事で已に報告せるものとを比較して興味深い結論を述べている。即ちこの論文に於て 1 新種, 1 新結合, 1 新名称そして 1 新科の創設を提唱した。直接本邦の海藻フロラとは密接な関連はないかも知れないが我国の南極探検隊も活躍の折、茲に抄録しておくことも有意義かと思う。

そこでジノバの調べた 2 個体の標本は本論文の第 1 図 (p. 373) 及び第 2 図 (p. 374) に示されているが、それ等はヒマントタルス コロトケビッチ (*Himantothallus korotkevicii* A. ZINOVA sp. nov.) の学名が与えられ、新種としてラテン文の記載をつけて発表されている (p. 378)。その要旨は次の通りである。『体は基部扁平、附着器は多数・不規則に分岐して枝を蔽つている。柄及び枝は扁平にして長短あり、単条或いは偽叉状に分岐している、基部と分岐筒處の下部は扁平状に拡がつている、螺旋状に捩ちられている。葉片は披針状線形、楔形、全縁或いは細長い裂片を有する、膜質、皺あり、螺旋状に捩ちられている』。